# 「薄桜鬼」第一話

四稿

原作：オトメイト
脚本：保木本真也

1　京（夕）

京の街並み。

T　「元治元年四月・京」

2　京裏通り（夕　～　夜）

京の活気ある街並み。

ある宿屋になにやら必死に訪ねている者の足下。「剃髪で、江戸訛りのある４０代の男性で」と。

×　×　×

その者が別の場所で「蘭方医なのですが」と、足下。

×　×　×

また別の場所で……

千鶴　「父を捜しているんです」

訪ねていたのは雪村千鶴。切羽詰まった様子の千鶴。

訪ねられた人物は、解らない様子だ……。

千鶴　「……」

頭を下げる千鶴。気が付けば夜。辺りは人気がない。

千鶴　「（手がかりがないことに焦りつつ、宿を探そうと歩きだす）」

と、その瞬間、千鶴の小太刀を誰かが握る……！

ハッとし、距離を取り振り返る。そこに浪人が二人。

浪士１「寄越せ。国の為に使ってやる」

千鶴　「……（刀にゆっくり手をかける）」

と千鶴、突然踵を返しダッと走り出した。

浪士２「（な！？　と追う）」

時折後ろを気にしつつ懸命に走る千鶴。息を切らしつつ角を曲る。

浪士たちも角を曲がる。が、そこに千鶴の姿はない。

浪士１、刀を抜き隠れているであろう千鶴の気配を探るようにゆっくりと足音を殺して歩く。

千鶴　「（身を隠し震えを必死に押さえ、息を殺している）」

浪人１「……貴様……」

千鶴　「（気づかれた！　と思う）」

が、浪人１が見ているのは浅葱色の羽織が翻る男。

その男の頭髪は、不気味な白髪だ（羅刹）。
千鶴、物陰から覗き見、助かったと安堵した矢先、

羅刹　「（不気味な真紅の目でキッと浪人1を睨んだ！）」
羅刹は人間とは思えぬ超人的なスピードで浪人1に襲いかかる！　浪人1、なんとか羅刹の刀を食い止める（と言うよりも構えていた所に偶々当る）。

浪人2「（浪人1を助けようと羅刹に切りかかる）」
羅刹の腕が浪人2により切りつけられ出血する。が……羅刹の腕は少量の煙をあげ瞬く間に怪我が治癒してしまう。

千鶴　「（それを見て）！！」
羅刹、驚く浪人1・2を斬り伏せる。技巧もなにもなく暴力に任せ死亡した後も何度も何度も滅多刺し。

羅刹　「（揚げ句、浪士の死体から血をすする）」
羅刹、顔を上げる。顔は浪士の血で赤く染まる。
羅刹の恍惚な表情は到底人間とは思えない。
その時……コトンと音が鳴る。羅刹の動きが止まる。

千鶴　「！！（その音は千鶴の震えにより木が倒れた音）」

羅刹　「（音には気が付かなかったような静けさ）」

千鶴　「（気づかれなかった……？　と一瞬思う。……が）」

羅刹　「（にやつき真紅の瞳で千鶴を見る）」

千鶴　「！！」
羅刹、千鶴に急襲。千鶴は恐怖で動く事が出来ない。
羅刹の凶刃が千鶴に！
京の街に刀で切りつけられた音が響いた……。
千鶴が切りつけられた、かに見えた心臓を貫かれているのは羅刹。貫いた人物は、新選組・斎藤一だ。
そこに新選組・沖田総司が現れる。

沖田　「（自分が切りたかったのにといわんばかりに斎藤に）……こんな時に限って仕事早いよね」

千鶴　「（助かったが、助かった気はしない）……」

斎藤　「……」
千鶴に影がかかる。千鶴、振り返り視線を向ける。
その時、風が強く吹き、近くに立つ桜が揺れた……。

風で散った花びらの行方を追うと、千鶴の眼前で刀の切っ先を突きつけた新選組・土方歳三が。千鶴が見上げる土方は、美しい月明かりを背負い、背後ではちらちらと桜が舞っている。桜を散らせた風は土方の長い漆黒の髪を揺らした。（スチルカット）

千鶴は刀を向けられているが土方から瞳が離せない。

土方　「（そんな千鶴を見て、怒りとも困惑とも思える目に）」

千鶴　「……」

土方　「（冷厳に）逃げるなよ。背を向ければ斬る」

千鶴　「……（視線を土方に留めたまま頷く）」

土方　「……（眉間に強く皺を寄せ、苦々しげ。刀を収める）」

斎藤　「（土方の様子を窺いつつ、羅刹の隊服を脱がせる）」

沖田　「（斬らないことが意外）見られちゃったんですよ？」

土方　「こいつの処分は帰ってから決める」

京の俯瞰。桜が舞い散る中、四人だけがそこにいた。

○　タイトル「薄桜鬼」第一話

3　屯所（壬生）・外観（夜）

4　同・部屋

縛られて、部屋に監禁されている千鶴。

千鶴　「……」

5　回想／江戸にある千鶴の家

綱道　「千鶴。またしばらくの間、京の都へ行くことになった」

千鶴　「お仕事？　しばらくって――」

綱道　「（首を横に）」

千鶴　「……そう」

綱道、千鶴に飾ってあった小太刀『小通連』を渡す。

綱道　「安心なさい。お前は、自分が思っているよりずっと強い子だ」

千鶴　「（父を見る）」

綱道、そんな千鶴の頭にそっと手を置く。

神津　「（優しい笑顔を千鶴に）」

6　戻って、部屋

千鶴　「（父から渡された小太刀は取り上げられており）……」

そこに井上が来る。

井上　「（扱いに申し訳なさがありつつ）……来なさい」

7　屯所（壬生）・広間（夜）

千鶴、井上に連れられ広間に。行灯のあかりのみで薄暗く、千鶴には不気味に感じられる。土方・沖田・斎藤。新選組局長近藤勇・総長山南敬助・藤堂平助・原田左之助・永倉新八がいる。土方の前に座る千鶴。

土方　「荷物を改めさせてもらった」

千鶴　「……」

土方　「おまえの目的は何だ。……雪村千鶴」

近藤・山南は聞かされていたがそれ以外は驚く。

永倉　「（目を見開き）雪村って……！」

原田　「まさか綱道さんの――！」

千鶴　「（必死に）父をご存知なんですか……！？」

顔を見合わせる面々。

千鶴　「父を探しているんです！　もし何か知っているなら――」

土方　「何処まで知っている」

千鶴　「……ど、こまで……？」

土方　「雪村綱道が何をしてたか知ってて来たんだろうが！」

千鶴　「（怯むも必死に）父は、仕事で京に来たはずです！　でも夏に急に連絡が途絶えて、それで……」

山南　「下手な男装は現在の京の治安を考えてのことですか」

藤堂、一間あってから「……女？」と、永倉も千鶴の男装に気づいてなかった様子。原田が呆れる。どうやら、近藤も気が付いていなかったよう……

千鶴　「（山南に頷き）京に来て、父が懇意にしていた松本良順先生を訪ねたのですがお留守で……。それで父の行方を聞

いて回ったのですが（男装してても）結局は浪士たちにからまえれてしまい……」

山南　「……本当に何も知らないのかも知れませんね」

千鶴　「皆さんと、父とは……」

原田　「……（千鶴の問いに応えず）どうするんだ、土方さん」

沖田　「（意地悪なのか本気なのか）殺しちゃいましょうよ（或いは「斬っちゃいましょうよ」）」

藤堂　「血に狂った理由を知っちまったわけじゃないんだろ？」

千鶴　「……理由……？」

土方　「平助」

沖田　「あーあ。……これで、ますます」

千鶴　「待って下さい、父は！　どうなってるんですか……！？」

土方、視線のみで近藤を見る。

近藤、難しい顔を浮かべ……

土方　「……（隊士たちに）おい」

千鶴　「（殺される事への恐怖で顔を伏せる）」

土方　「こいつを……もう一度部屋に戻せ」

千鶴　「（え、と）」

土方　「平助はそのままこいつを見張ってろ。近藤さん（二人で向こうの部屋で話そうと視線で示唆）」

近藤　「ああ（と、立ち上がる）」

藤堂　「（土方に、千鶴の縄を）ほどいてやっていいか？」

土方　「……（頷く）少しでも逃げるそぶりを見せれば斬れ（近藤と共に出て行く）」

8　同・部屋

千鶴を部屋に戻る。縄をほどこうとする藤堂。

藤堂　「固っ、総司、きつく縛り過ぎだろ……っ！」

千鶴　「（藤堂の言葉は入ってこず不安でたまらない）」

9　同・近藤の部屋

近藤　「見られてしまっているんだろう……羅刹を」

土方　「血に狂った姿をはっきりとな」

近藤　「しかし（斬るのは）……。綱道さんのお身内だぞ」
土方　「その綱道さんが俺達の前から姿を消してその直後に身内が現れた。……偶然にしちゃ少し出来過ぎじゃねぇか？」
近藤　「……まさか、綱道さんは攫われたのではなく故意に居なくなったと言いたいのか」
土方　「（眉間に皺）綱道さんが俺達を裏切り、姿を暗ました。こちらの動向を探るめに奴を間者として寄越した」
近藤　「……羅刹の利用価値を考えれば綱道さんは攫われたと見ていたが」
沖田の声「そんな感じの子には見えないですけどね（襖を開ける）」
土方　「総司。広間で待ってろ」
沖田　「話しがあるみたいですよ……」

10　同・土方の部屋・前（翌日・朝）

11　同・同・中

土方の前に、千鶴がいる。

土方　「殺されるか……」
千鶴　「（俯く）」
土方　「雪村綱道を探すのに協力するか……どちらかを選べ」
千鶴　「（意外な答えに）……」
土方　「早くしろ」
千鶴　「あ……協力します。私も一緒に捜させて下さい……！」
土方　「……他に隠してることはなにもないだろうな」
千鶴　「……ありません」

土方より『小通連』を含む荷物が千鶴の前に。

土方　「昨夜のことは忘れろ。いいな」
千鶴　「はい」
土方　「屯所にいる以上特別扱いはしない。男として扱う。そのつもりでいろ」
千鶴　「（頷き）……では……父はここにも……」
土方　「行方は新選組でも捜している。共に幕命を受け動いていたが、夏に診療所で火事があってから行方知れずだ」

千鶴　「（そんな……、と）」

土方　「遺体は見つかってねぇ。なんらかの事件に巻き込まれたと見ている」

×　×　×（時間経過）

千鶴、一礼し土方の部屋を出て行く。

土方　「（昨晩の事を思い出す）」

×　×　×

近藤の部屋にて、Ｓ８の続きのフラッシュ。

土方　「総司。広間で待ってろ」

沖田　「話しがあるみたいですよ……山南さんが」

山南　「（姿を見せ）同じ人間を捜す者同士、彼女に協力してもらうというのはどうですか？」

土方　「……」

山南　「彼女が手中にあるというのは、綱道さんを探す上で何かと都合が良いと思いますよ。彼が攫われていたとしても、我々を裏切りっていたとしても……」

×　×　×

土方　「（千鶴が出て行った方を、眉間に皺を寄せ睨む）」

１２　モンタージュ（日替り）

巡察など新選組を思わせるイメージカット（撮影しやすい映える場所でのカット）。仰々しい雰囲気。

１３　屯所（壬生）・千鶴の部屋（朝）

千鶴、自室の障子を開ける。

千鶴　「……」

１４　同・表

巡察に出る山南の隊。山南と話しをする土方。

土方　「攘夷派の連中の動きが気になる」

山南　「京、大坂に長州人が多数潜入しているという話しですね」

×　×　×

出発する山南と隊。厳しい表情で見送る土方……

## 15　同・庭の見える廊下

山南隊と交代で巡察を終えた沖田・斎藤。

千鶴　「（自室から来て二人に声をかける）あの」
沖田　「無闇に出歩かない様に言われてるんでしょ？」
千鶴　「……私も父を捜しには出られないでしょうか」
斎藤　「無理だ。あんたの護衛に割く人員は整っていない」
千鶴　「身を守るくらいであれば、剣術の心得ならあります」
沖田　「京に来てすぐ不逞浪士に殺されかけてなかったっけ」
千鶴　「……（悔しい、が図星）」
斎藤　「（千鶴の様子を見て）ならば俺が試してやろう。腰のものが飾りでないと証明してみせろ（と、庭へ出る）」
千鶴　「（え、と）……でも……刀を使ったら斎藤さんが」
沖田　「（千鶴の発言に笑いを堪える）」
千鶴　「（そんな沖田を困惑して見る）」
斎藤　「……どうしても刀を使いたくないのなら、峰打ちで来い」
千鶴、逡巡するも庭へ下り小太刀を抜き、刃を返す。
千鶴　「お願いします」
千鶴と斎藤、少しの間見つめ合う。
千鶴、声をあげ斎藤に斬りかかる。
宙を舞う千鶴の小太刀。（殺陣シーンは見せず）
気が付けば千鶴の首筋には斎藤の刀が。（スチルカット）
千鶴　「（何が起こったのか解らない）」
沖田　「（小太刀を拾い）一くんが本気だったら死んでるよ」
千鶴　「（斎藤のあまりの腕に言葉が出ない）」
沖田　「（笑顔）良い小太刀だね」
千鶴　「……すみません、でした。捜しに行くのは（諦めます）」
斎藤　「師を誇れ。あんたの剣には曇りが無い」
千鶴　「（え、と）」
沖田　「（「へぇ」と斎藤にしては珍しいなと）」
土方、そんな三人の様子を見ている。斎藤も沖田も土方がいるのには気が付いている。
斎藤　「巡察に付添う形で良ければ、副長に進言しておこう」
千鶴　「！　よろしくお願いします」

土方、その場をあとにする。

沖田　「（ぱちぱちと千鶴に手を叩く）」

藤堂　「あのさー（と、来て）飯の時間なんだけど」

斎藤　「すまん。今行く」

斎藤・沖田、その場をあとに。

藤堂　「千鶴も。食うものなくなっちまうからさ」

千鶴　「すみません藤堂さん、すぐに」

藤堂　「あー」

千鶴　「？」

藤堂　「その『藤堂さん』ってやめない？　みんな『平助』って呼ぶから、それでいいよ」

千鶴　「（え、と）」

藤堂　「あと、ですますもやめようぜ」

千鶴　「……（若干ぎこちなく）平助くん、でいい？」

藤堂　「（笑顔）」

16　屯所（壬生）・広間

千鶴の前には食事の乗ったお膳。

千鶴　「（チラりと横を見る）」

永倉・藤堂が物凄い勢いで食事をしていて騒がしい。

藤堂　「（永倉に魚を横取りされ）あ！！」

永倉　「（もぐもぐしつつ）弱肉強食の時代だ」

藤堂、やり返そうとする。永倉、そうはさせまいと。食うか食われるかの激しい戦い。騒がしいのを我関せず粛々と食事をする斎藤。笑顔で見る沖田。その姿は千鶴が感じていた新選組とは違う姿だ。

千鶴　「（思わずクスリと笑ってしまう）」

原田　「（優しく千鶴に）最初からそうやって笑ってろ」

千鶴　「（え、と原田を見る）」

原田　「俺らも、おまえを悪いようにはしないさ」

千鶴　「……（少し緊張が和らぎ）夕飯は一人で食べることが多かったので、こうして皆と食べるのって楽しいです」

原田　「（千鶴に優しく微笑む）」

千鶴、食事に手を付ける。

沖田　「只飯とか気にしないでおなかいっぱい食べるんだよ」
千鶴　「(只である事に気づき)あ、私に出来ることならなんでも」
斎藤　「気にしなくて良い」
千鶴　「いえ、お掃除でも、お食事の準備でも、出来ることはやりたいです。お願いします」
少し間が産れるが、皆笑顔。
と、そこで襖が開く。焦った表情の井上が。
井上　「大変だ。山南さんが……！」

１７　同・門前

山南、帰宅する。左腕を包帯で吊っている。
井上の声「隊務中に重傷を負ったらしい。命には別状ないみたいだが、傷が左腕で……もう剣を握るのは難しいみたいだ」

１８　同・広間

沖田　「……（悲しそうに）山南さんには薬でもなんでも使ってもらうしかないですね」
永倉　「めったなことを言うもんじゃねえ。幹部が『羅刹』になってどうすんだよ」
千鶴　『『らせつ』……？」
皆、千鶴の問いには答えようとしない。重い空気。

１９　同・広間前廊下（夜）

山南、左手で刀を握ろうとする。が、力が入らない。
山南　「（険しい表情）……」

２０　同・廊下（朝・日替り）

Ｔ　「元治元年六月」
廊下を掃除している千鶴。汗を拭くきふと振り返るとそこに土方が。千鶴、ビクっと驚く。
土方　「今日から市中を巡察する隊士に同行しろ」
千鶴　「（え、と）」
土方　「巡察する組長の指示には必ず従え。いいな」

千鶴　「（捜しにいけることに希望を持ち）はい！」
土方　「木屋町周辺で綱道さんらしき人を見たという証言がでた」
千鶴　「父が……！」
土方　「真偽は定かじゃねぇ。本人かどうかを確かめるにはおまえが一番だということだけだ」
千鶴　「（嬉しそう）はい」
土方　「逃げれば即座に斬り殺すよう組長には命じてある」

## 21　京大通り（昼）

千鶴、沖田率いる一番隊の巡察に同行している。京の人々の新選組への目線。少し気になる千鶴。

×　×　×

千鶴、聞き込みをしている必死な様子。しかしなかなか有力な証言は得られない様子だ。
そんな千鶴を横目でみる沖田。

×　×　×

町人1「あー……そこの桝屋さんで見かけたような……」
千鶴　「！　ありがとうございます！」
千鶴、桝屋の方へ駆け出す。
沖田　「（駆け出す千鶴に気づいて）あ（千鶴を追おうとする）」
その時、隊士と浪人風情の男がもめる。
隊士　「貴様ら浪人か！？　主取りなら藩名を答えろ！」
沖田　「……（ため息をつき、浪人と隊士のもとへ）」

## 22　桝屋・前　～　中

千鶴　「（ここかな？　と）ご免下さい（と、入って行く）」
そんな千鶴を見ている一人の男（山崎）……。
店主（古高）「へえ」
千鶴　「少しお尋ねしたいことがあるのですが、ここに――」
店の者1「！　そいつ今新選組と一緒にいたやつだ！」
店主（古高）「！！　（店の奥に声）逃げろ！！」
千鶴　「（混乱しつつ）あの！」
店主（古高）、千鶴に刃物を向ける。

千鶴　「！」

店主(古高)、今にも襲いかかろうとした！　その時、

沖田の声「あーあ」

千鶴が振り返ると沖田がいる。

沖田　「君って運がないよね。……こいつらも」

沖田含め新選組隊士が店内に一斉に入り改め出す。

奥へ逃げて行く店主。奥では戦闘を繰り広げている

様な音を千鶴が耳にする。(戦闘している姿は見せず)

沖田、桝屋の中を探る。(史実では地下室で発見)

そこで、大量の武器弾薬を発見する沖田。

沖田　「(それを見て「へぇ」と)……」

## 23　屯所(壬生)・表

捉えた人物が連行されてくる。

## 24　屯所(壬生)・蔵前

## 25　同・蔵中

古高が吊るされている。拷問により傷つけられた痕

が目立つ。古高の前に立つ土方。

土方　「(険しい表情)言え。京で何をしようとしてる」

古高　「(険しい表情)」

## 26　同・蔵前

蔵を見ている千鶴。

近藤　「(千鶴を見つけ)雪村くん、どうしたこんな所で」

千鶴　「(あ、となり)いえ……」

近藤　「……何かあったのかね？」

千鶴　「……捉えてきた人は……殺してしまうんでしょうか……」

近藤　「……(難しい表情になる)」

千鶴　「……」

近藤　「殺すことも厭わんだろうな」

千鶴　「(自分が桝屋に行かなければ……、と思い辛い)」

近藤　「我々は今、京の治安を任されている身だ」
千鶴　「その為には、ということですよね……」
近藤　「……雪村君」
千鶴　「……」
近藤　「奴に食事を用意してやってくれるか」
千鶴　「（え、と）」
近藤　「頼む」
千鶴　「（殺したくて殺しているわけではないのだと思い）はい」
近藤　「すまんな（優しい笑顔を向ける）」

27　同・台所

千鶴が料理をしている。

28　同・羅刹研究室

山南がいる。そこには羅刹の研究をする器具等が所狭しとおかれている。その傍らには鎖でつながれた（或いは牢）白髪で赤目の空ろな表情の隊士がいる。

山南　「（真紅の液体の入った小瓶を見つめる）」
その小瓶は怪しく、禍々しい……。
と、その瞬間！　鎖に繋がれた隊士に右腕を捕まれる山南。山南、振り払う。隊士、その際に腕を怪我し血が出る。が、少量の煙を上げ治癒する。
山南　「……（私にもこの力があれば、と悩む）」

29　同・台所

と、その時。包丁で指を切ってしまう。
千鶴　「痛っ……」
千鶴の鮮血が床にポタポタと落ちる。
が……千鶴の怪我をした指は少量の煙をあげ見る見るうちに治癒してしまう。それはまるであの羅刹の治癒力と全く同じだ――

第二話へ続く